

学生サポートルームの役割

学生サポートルーム 運営委員長
高橋 伸夫

経済学部・経済学研究科では、経済学部の学生や経済学研究科の大学院生が気楽に立ち寄れる相談の場として学生サポートルームというサービスを提供している。臨床心理士の資格を持つ複数の相談員が、学生生活、対人関係、進路・学業など、学生が持つ様々な悩みごとや相談ごとに対して、話し相手となり、必要な支援を行っている。学生サポートルームの開設は2012年4月、早くも8年が経とうとしている。

私個人の経験としては、駒場の教養学部に助教授として赴任した際、教務委員会で初代の「満期担当」を仰せつかったときの印象が強烈に残っている。留年を繰り返して、本郷に進学できなくなった「満期」の学生に親が付き添って相談にやって来る。その30組以上を一人で相手するのが私の仕事だった。つまりくきっかけは理科、文科で違いはあるものの、その多くは、留年して友人が周りからいなくなると、大学から足が遠のき……という悪循環に陥って満期を迎えていた。

私が、他大学の学生と比べて、東大生がかわいそうだと思ったのは、そんな状況で大学に行かなくなった子供たちに親が注意しても、「ちゃんと単位を計算しているから」とか「自分の進路はよく考えているから」とか返されると、親の方でも「東大生なんだから大丈夫だろう」と思って、それ以上叱らないことだった。おそらく、他大学の学生だったら、親は「学費を払って食わしてやってるんだから、四の五の言わずに大学に行け」と叱り飛ばして、家から大学に追い出していたのではないかと思う。

われわれには親の代わりはできない。しかし、相談に乗ることはできる。大学に行けば、知った顔の人がいる……の「知った顔」になることもできる。2019年度の来談件数は30件（前年度50件）で、そのうち新規の来談件数7件（同12件）に対して、継続来談件数は23件（同38件）と、学生サポートルームの利用者にはリピーターが多いらしい。結構なことである。教室や研究室から至近の赤門総合研究棟の6階に行けば、そこには「知った顔」がいる。

相談内容としては（2012年度から2019年度までの累計）、「進路・学業」が397件と突出して多く、「心身健康」（124件）、「大学生活」（116件）、「自己」（101件）、「対人関係」（75件）と続いている。2019年度に限ってみても、「進路・学業」の相談が最も多い。ただし「進路・学業」に関する相談の中でも、「大学生活」や「心身健康」など他の相談内容が同時に語られる場合があり、それらのケースでは継続して長期に来談する傾向があったという。閉じこもってしまわずに、とにかく相談に来てほしい。